

## 目を覚ましていなさい

(ルカによる福音書12:35～40、ハバクク書2:1～4)

今朝は、ルカによる福音書12章35節から40節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「目を覚ましている僕」と言う小見出しがついた個所の前半の部分が、説教のテキストになります。日本キリスト教会信仰の告白で言えば、前文の“教会”に関する項の終わり、「終わりの日に備えつつ、主が来られるのを待ち望みます」の部分、及び、使徒信条の“イエス・キリスト”に関する項の終わり、「そこから来て、生きている者と死んでいる者とを審かれます」の部分に対応し、その聖書的根拠となっている重要な箇所です。ここでは、世の終わり、つまり、終末、キリストの再臨、最後の審判に備えるために、教会は、それに属するキリスト者は、どう生きるべきか、色々な譬えを用いて語られているのです。勿論、教会は、主イエスの十字架、復活、昇天以後に起こった聖霊降臨をもって始まったのですが、主イエスは、それに先立って、既に、この時点で、教会、それに属するキリスト者の、地上にある間の、あるべき姿を、お語りくださっていたのです。と言うのは、教会は、イエス・キリストの誕生、即ち、第一の降臨に始まり、第二の降臨、即ち、再臨の間の、言わば、中間時代を生きる者であるからです。既に、終わりは定まっているのです。でも、それが何時来るかは分からないのです。そんな中で、教会は、その肢（えだ）であるキリスト者は、どう生きるべきか、それが問われて来るのですが、今日の箇所は、これに回答を与える内容となっているのです。だから、心して学んでまいりたいと思います。

先ず、今日の箇所の最初の部分35節、36節を、もう一度読み直してみたいと思います。「『腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。主人が婚礼から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい』」。ここには、主人の帰りを待つ僕の姿を借りて、再臨のキリストを待つ教会のあるべき姿が示されています。その第一番目の指示は、「腰に帯を締める」と言うことです。当時ユダヤ人たちは、長い裾の垂れた外衣（ローブ）を着ていました。寛（くつろ）ぐには適していますが、活動するには不向きです。だから、駆け出す時や、戦いに臨む場合には、腰に帯をして、垂れる裾をたくし上げ、帯でそれをしっかりと止めたのです。「腰に帯を締める」と言うことで、先ず思い出されるのは、その昔、イスラエルの民がエジプトを脱出した際にとった態度、その出で立ちです。彼らは、それを、過越の祭の度毎に再現しました。出エジプト記12章11節にこう述べられています。「それを食べるときは（それとは過越の小羊のことです）、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べる。これが主の過越しである」と。そのようにして、かつてのイスラエルの民は、慌ただしく、しかし、しっかりと身支度をして、奴隷の地エジプトを脱出したのです。新しいイスラエルである教会も、罪の世を脱出するべく、何時その時が来てもよいように、そして、その時には、身軽に駆け出せるように、常に、腰に帯をしめて、それに備えるのです。今一つ、腰に帯を締める、と言うことで、どうしても忘れることができないのはエフェソの信徒への手紙6章11節に述べられている「悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい」と言う、勧めの言葉の中に出て来る一節です。それは14節に出て来るのですが、それはこうです。「立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、云々」と言うのです。帯は帯でも、それは真理の帯でなければ、悪魔の策略には対抗できないと言うことなのです。

確かに、悪魔は、悪知恵に長けていて、光の天使にさえ偽装するのですから（コリント二 11：14 参照）、油断も隙もありません。では、真理とは何か、と言う疑問が次に湧いて来るかも知れません。それは、漠然とした真理一般を指すのではなく、単刀直入に言えば、真理とは、主イエス・キリスト以外にあり得ません。ヨハネによる福音書 14 章 6 節に、「イエスは言われた。『わたしは道であり、真理であり、命である』」と、記されている通りです。だから、真理、即ち、キリストを帯とすると、常に、どこにあっても、キリストと固く結び合わされ、共にある、と言うことではないでしょうか。

次、第二番目の指示は、「ともし火をともし」と、言うことです。ともし火をともし、と言うことで、第一番目に思い出されるのは、これも旧約聖書の故事で、サムエル記上 3 章 3 節に出て来る、「まだ神のともし火は消えておらず」と言う言葉です。当時のイスラエルの霊的指導者はシロの祭司エリでした。しかし、彼は老齢に達し、彼の後を継ぐべきエリの二人の息子ホフニとピネハスは、親の感化を少しも受けず、受けぬどころか、それ以下の、ならず者ですらあって、そのため、イスラエルは霊的に極めて低調な、お先真っ暗な時代を迎えつつあったのです。ところが、主なる神は、不思議な計らいをもって、ハンナの祈りの子、サムエルを、エリの後継者に定め、幼い頃からエリの許で育てられることになり、早くも、少年サムエルには、神の言葉が語られ、授けられ、託され、預言者として立つべく、その日に向かって、着々と備えられつつあったのです。これを聖書は、「まだ神のともし火は消えておらず」と、表現したのです。教会にも、たといお先真っ暗と言うような時代になったとしても、神のともし火を決して消さず、点し続ける、と言うサムエル記的使命が託されているのです。

もう一つ、「ともし火をともし」と言うことで、忘れることができないのはマタイによる福音書 25 章 1 節以下に出て来る『十人のおとめ』のたとえ話です。花婿を迎えるため、灯を持って待つ乙女の内、五人は油を別に用意していたのに、他の五人は用意していなかったため、肝心な時に、灯が点かず、油を買いに行っている間に、花婿は到着し、直ちに、用意を整えていた他の五人の乙女たちに、暗闇の中を道案内され、花嫁の待つ宴会場に行ってしまった、と言う、あの話です。当時結婚式、及び、その披露宴は、夜に、それも深夜に催されましたから、道案内には、灯は欠かせなかったのです。ここに出て来る 10 人の乙女は、花嫁の友人で、花婿を花嫁が待つ家か、宴会場に道案内をする役目を担ったのです。ところが、この内の五人は、予備の油を用意していなかったために、いざという時に、役に立たず、無要の長物になり果ててしまったのです。と言う訳で、「ともし火をともし」とは、花婿なるキリストを、その花嫁となるべき人の許にお連れする、と言うことで、それは教会に託された伝道の業、そのための心遣い、を暗示していると解釈して、間違いはありません。肝心な時に、それができないとは、日頃の備えができていなかった。と言うことで、人を導くにも、日頃からの備えが如何に大切かを、その譬え話は告げているのです。

37 節に移りたいと思います。読んでみます。「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」。「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる」と言う言葉で、直に思い出されるのは、ゲッセマネの園での弟子たちの姿です。マルコによる福音書 14 章 37 節以下には、こう記されています。「それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。『シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい』」と。この時の弟子たちは睡魔には勝てなかったのです。確かに、

人間は睡魔には勝てません。眠ることは、生命を維持する上でも欠かせないことです。でも、魂まで、霊性までも、眠り込ませてはいけません。肉体の眠りも、霊性を活性化させるため、眠りの中に、霊性まで置き忘れてはいけません。ヨハネの黙示録3章1節以下には、見者ヨハネが、サルデイスにある教会に書き送った、こんな言葉が記されています。

「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。目を覚ませ。死にかけている残りの者たちを強めよ」と。体は生きていても、最早、魂は、霊性は、死にかけている、と言う状態は、大いに起こり得ることです。そこで魂の牧者でもある見者ヨハネは、目覚めよ、魂を死の手に渡すな、と、何とかサルデイスの教会を奮い立たせようと、こうした言葉を送って、懸命に励ましているのです。

ここに、もう一つ私たちの注目を引く言葉が出て来ます。帰って来た主人が、待っていた僕たちを食卓に着かせ、自ら、彼らのために給仕する、と言う話です。こんなことは普通はあり得ないことです。でも、主イエスと弟子たちの間では、何ら不思議なことではないのです。と言うのは、マルコによる福音書10章45節で、主イエスは、次のように語っておられるからです。「人の子は（つまり、イエス・キリストは）仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を捧げるために来たのである」と。それが最も際立った仕方で示されたのは、最後の晩餐の席でした。ヨハネによる福音書13章1節以下によると、この時主イエスは、上着を脱ぎ、手拭いを取って腰に纏われ、盥（たらい）に水を汲んで、弟子たちの足を洗い、腰に纏った手拭いで拭かれた、と言います。足を洗うのは、奴隷のする仕事でした。十字架も奴隷のみが架かる刑罰でした。実に、主イエス・キリストは、「神の身分でありながら、・・・僕（奴隷）の身分になり、・・・へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」と、フィリピの信徒への手紙2章6節以下に述べられている通り、正に、その通り、寸分の狂いもなく、生き通されたのです。

次ぎ、38節を読んでみましょう。「主人が真夜中に帰って来ても、夜明けに帰って来ても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ」。ここで“真夜中”と訳されている元の言葉は、“第2時”で、“夜明け”と訳されている言葉は、“第3時”なのです。ユダヤでは、夜の時間は3等分され、“第1時”は、午後6時から午後10時まで、“第2時”は午後10時から午前2時まで、“第3時”は午前2時から午前6時まで、と、そう区分されていたのです。この譬の主人は、婚宴の席に、客として出席していたことになっているのですが、終わるのが第2時ならば、午後10時から午前2時の間、終わるのが第3時ならば、午前2時から午前6時までの間、と言うことになり、いずれにしても、結婚の披露宴は、真夜中から夜明けにまで及んだのです。今日、ホテル等で行われる、結婚式及びその披露宴のように、時間通りに始まり、時間通りに終わる、と言うことは、この時代、ユダヤでは、あり得ませんでしたから、このような譬え話も成り立つのです。主人の帰宅が何時になるか分からない、と言うことは、何か魂胆か、特別な意図があって、そうになっているのではないのです。それは、当時としては、極当たり前のことだったのです。だから、それ以上のことを、この話に読み込もうとすれば、却って、話を混乱させてしまいます。

最後、残った39節、40節を読みます。「このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るか知っていたら、自分の家に押し入れさせはしないだろう。あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時にくるからである」。ここで突然、キリストの再臨が、不意を襲う泥棒の侵入に譬えられ、いささか私たちを面喰わせます。でも、その譬えは、あながち不適合、不適切とも言えません。と言うのは、キリストの再臨は、世の終わりをもち、その日は、最後の審判が行われる時でもあるからです。迂闊にも、

泥棒の侵入を許して、大損害を蒙る者があるように、終わりの日のため、何の備えもなく、思い掛けない仕方で、その日を迎える者にとっては、確かに、泥棒に襲われたに等しい大損害を受けることは、間違いありません。でも、その日が来ることを固く信じ、備えて、全き救いが完成するという希望を抱き、首を長くして待ち望む者には、その日は、喜び以外の何ものでもないはずで、それが、待つに甲斐ある日であることは、疑いようがありません。何せ、長年慕い続けて来た最愛のお方、主イエス・キリストに、いよいよ直接お目にかかれるのですから、これに勝る喜び、幸いは、他に考えようがないのではないのでしょうか。

ところで、この個所で強調されている点は、終末、キリストの再臨、最後の審判は、やがて来ることは確かであるが、その日が何時であるかは、誰にも分からない、と言う点です。主イエスも、マルコによる福音書 13 章 32 節で、「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである」と言われました。にも拘わらず、執拗に、その日が何時か、詮索しようとする者たちが、何時の代にも存在しました。どう言う計算をするのか分かりませんが、まことしやかに、何時いっかだと、年月日まで言い出す者がいました。今もいます。でも、すべてはまやかしです。そのような騙しごとに乗ってはいけません。天使でさえ、否、主イエス御自身でさえ、知らない、と言われるものを、誰が一体、分かると言いつけるのでしょうか。或る人が言いました。「キリスト者は、再臨は何時あるのか、徒に思弁を弄すべきではない。時が良くても悪くても、ただ、託された務めを果たすことに、集中すべきである」と。

私たち、主の再臨について学んだ今、思いを新たに、「マラナ・タ（主よ、来てください）」（コリント一 16：22）と祈りつつ、腰に帯を締め、目覚めて、灯を消すことなく、主の御業に励み続ける者でありたく、願わずにはおられません。

（三輪恭嗣）